

ダンテ神曲 イタリア

従兄弟から800頁を超える分厚い平川祐弘著ダンテ『神曲』講義が送られてきた。従兄弟が巻末に文章を書いている。

ダンテといえば神曲で名高いが、さて“神曲”とは何か、今まで考えたこともなかったが、それは文学なのか、ひょっとしたら字面からすると神にささげる楽曲かも知れないなど自問自答しながら大著を手にとったまま、あまりの無知にひとりで顔が赤らんだ。そしてよし時間がかかるが800頁を読み切ってみようと力んだ。

13世紀ローマ教皇庁と神聖ローマ帝国との間で勢力争いがあり、政争の果てにダンテ側が勝利し一度は要職に就くが敵対勢力が巻き返しダンテは故郷フィレンツェを追われ、各地を流浪しながら執筆活動に本格的に取り組むようになる。

イタリアに起こったルネサンス運動はまず人文主義者から始まった。人文主義者とはギリシャやローマの古典の文献研究者を指す。ルネサンスは古典や古代の学問や芸術の復興であったが、それはやがて新しい人間性の追求へと進んでいった。

14世紀のイタリアの人文主義者を代表する人物と言え、詩人のペトラルカ、デカメロンを書いたボッカチオ、そして神曲ダンテの名が挙げられる。



ダンテのデスマスク

ダンテ・アリギエーリ（1265年～1321年）は、ボローニャ大学で学んだフィレンツェ出身の政治家であり詩人である。

初期の作品「新生」はダンテの恋する人忘れられない人ベアトリーチェへの個人的体験を綴ったものであるが、ダンテは神曲の中にもベアトリーチェを永遠の淑女として描いている。

当時の知識人たちは一般的にはラテン語で物を書く慣習であったが、ダンテはトスカーナ地方の言葉で書いた。

神曲はそのため多くの人に読まれることとなった。

神曲の執筆は1307年ごろから始まり、最後の天国篇はラベンナの地で執筆した。完成したのは1321年、死の直前であったという。

神曲は壮大な叙事詩であるがその構成は3部からなり、現世に居るダンテ自身が死後の世界を旅して地獄・煉獄・天国を巡るという形式をとり、14233行の長編叙事詩にまとめられている。地獄篇は34の詩歌・煉獄篇は33

の詩歌・天国篇は33の詩歌、合計100の詩歌で綴られている。

イタリア語の原題は「La Divina Commedia = 聖なる喜劇」である。神曲がなぜ喜劇かという悲劇でないのが喜劇だという論理である。日本では森鷗外が翻訳の中で神曲として記しそれが定着したが、イタリアでは“聖なる喜劇”が定着している。



ルカ・シニョレッリのフレスコ
画黙示録の“善人と悪人の選別”
(オルビエート)

神曲はイタリア文学最高の古典と言われているが、内容はダンテ自身が尊敬する古代ローマの詩人であるウェルギリウスに地獄から煉獄を案内され、煉獄の頂でベアトリーチェに出会い天国を巡るのであるが、旅の途次で教訓的な内容を詩歌に謳いあげている。書き出しの地獄篇の最初を例に引いてみると「人生の道半ばで正道を踏み外した私が目を覚ました時は暗い森の中にいた。其の苛烈で荒涼とした峻厳な森がいかなるものであったか口にするのも辛い、思い返しただけでもぞっとする。其の苦しさにもう死なんばかりであった。しかしそこでめぐり合った幸せを語るためにはそこで目撃した二、三のことをま

ず話そうと思う（平川祐弘ダンテ神曲講義より引用）このような調子で延々とダンテは地獄から煉獄へそして天国へ向かうのである。

神曲は多くの芸術家にもイメージされている。ミケランジェロがシステイーナ礼拝堂に描いた“最後の審判”では地獄絵図として取り上げ、ドラクロアは“ダンテの小舟”を描くなど、さらに音楽や文学、絵画様々な分野の人たちがイメージし題材としている。



フィレンツェにある再建された
ダンテの家

余談であるがフィレンツェ市内にはダンテの家とミュージアムがある。

狭い路地には観光客がひしめき、古めかしいダンテの家をカメラに収めている。だがガイドの話によればダンテの家は観光用に後年建てられたものだそうだ、なんともつや消しな話ではある。